

# すがわらでんじゆてならいかのみ

## 菅原伝授手習鑑

### 〔解説〕

延享三年（一七四六）八月、大坂竹本座初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。全五段。近松門左衛門の「天神記」を基本とし、当時のニュースである三つ子の誕生などを取り入れ書き下ろした物。二段目に菅丞相と苅屋姫の別れ、三段目に白太夫と桜丸の別れ、四段目に松王丸と小太郎の別れ、と、それぞれの段の切に親子の別れを描いており、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、時代物の三大名作として親しまれています。

### 〔あらすじ〕

【初段】延喜帝の御代、左大臣藤原時平、右大臣菅原道真（菅丞相）が政治の中心となっていたが、反逆心のある時平は、菅丞相を邪魔に思っていた。

帝は病のため、渤海国からの使者に対し、弟君の齋世親王が名代となる。

菅丞相の佐太村（現在の大阪府守口市内）の領地は、白太夫（四郎九郎）という百姓が預かっており、白太夫には、梅王丸・松王丸・桜丸という三つ子がいたが、それぞれ梅王丸は菅丞相、松王丸は藤原時平、桜丸は齋世親王の舎人（皇族などにつかえる下級役人）となっていた。

齋世親王は、天皇の病氣平癒祈願の参拝の折、桜丸と女房八重の手引きで、苅屋姫（菅丞相の養女）と密会をするが、時平の家来が詮議に来たため、親王と姫は、行方をくらまし、その後を桜丸が追う。

一方、名筆の誉れ高い菅丞相は、以前、不義の科で勘当していた武部源蔵を呼びだして、菅家の筆法を伝授する。兄弟子の希世の妨害に遭いながらも源蔵は筆法を伝授されるが、勘当は許されない。

時平は、齋世親王と苺屋姫の行方が知れないのは、菅丞相が親王を帝位につけ、娘を后にして、自分が実権を握ろうとしている策略であると、讒言(他人を陥れるため有りもしないことを上の人間に言うこと)する。そのため、丞相は閉門、流罪となる。危険を感じた舍人梅丸は、丞相の実子菅秀才を源蔵夫婦に預ける。

【二段目】桜丸は齋世親王と苺屋姫に追いつき、姫の実家の土師の里へ向かう途中で、菅丞相が流罪になった事を知り、一目会おうと行列の後を追う。安井の岸で汐待ちをしている一行に桜丸が追いつき、対面を願うが、菅丞相の罪が重くなるとして許されない。苺屋姫は、姉、立田の前に伴われて実母覚寿のいる道明寺へ向かうが、役人判官代輝国の計らいで丞相一行も土師へと向かうことになる。また、齋世親王と桜丸は都へと別れていく。

土師の里では、覚寿が、丞相が罪に問われたのは苺屋姫のせいだとして、姫を杖で折檻する。それを菅丞相の声に止められるが、不審に思った覚寿が襖を開けると、そこには伯母への形見として丞相自らが彫った木像があるばかりであった。

立田の前の夫、宿弥太郎とその父土師兵衛は、時平に頼まれ、偽の迎えになり丞相を連れ出そうと計画していたが、それを知った立田の前を殺す。偽の迎えが来て丞相を連れて行ったあと、覚寿は立田の前が殺されたことを知って宿弥太郎を刺す。そこへ、輝国ら本当の迎えが来るのだが、実は、偽の迎えに連れて行かれたのは丞相の木像で、人々は奇跡に驚く。そして、全ての悪事が露呈し土師兵衛も殺される。

丞相は覚寿や苺屋姫と別れて、名残を惜しみつつ太宰府へと旅立つのであった。

### 【三段目】

〔重曳の段〕梅王丸と桜丸は吉田神社で出会い、通りかかった時平を襲おうとして、舎人である松王丸と争うが、父の賀の祝を済ませてからと、その場は別れる。

祝の日、三兄弟の嫁達、春・千代・八重が集まり仕度をしている。四郎九郎は七十の祝に白太夫と名を改める。白太夫が八重を連れて氏神参りに行っている間に、梅王丸と松王丸がやってきて喧嘩を始め、白太夫が大切にしている菅丞相の御愛樹、梅、松、桜のうち、桜の枝を折ってしまう。

帰ってきた白太夫はそれを見ながら何も言わない。松王丸、梅王丸夫婦が帰った後、納戸に忍んでいた桜丸が現れ、丞相流罪の責任をとって切腹する。八重も後を追おうとするが、物陰に潜んでいた梅王丸夫婦に止められる。白太夫は八重を梅王丸夫婦に託して筑紫へと向かうのであった。

【四段目】太宰府の菅丞相は時平の反逆を知り激怒し、雷神となつて都へ飛ぶ。丞相の御台所は北嵯峨に隠れ住み、春と八重が仕えている。春の留守中に時平の家来が襲来し、八重は討ち死に、御台所は山伏に連れ去られる。

一方、武部源藏夫婦は、京のはずれで寺子屋をいとなみ、若君菅秀才を我が子として匿っていたが、これを時平に知られてしまい、首を討てと命じられる。源藏は思いあまって、その日寺入りしたばかりの子供、小太郎の首を切ってしまう。見分役である松王丸は、その首を秀才の首と認めて帰って行く。そこへ、子供の母親がもどる。実は、小太郎は松王丸夫婦の子供で、身替わりを覚悟で連れてきたという。松王丸も現れ、心ならずも時平に従ってきたが、これでやっと菅丞相の恩に報いる事が出来たと語るのであった。北嵯峨で御台所を救い出したのも、実は松王丸で、若君と親子の対面をする。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

## 車曳の段

鳥の子の巢に放れ、魚陸くがに上るとは、浪人の身のとへぐさ。菅丞相の舍人梅王丸、主君流罪なされ、より都の事ども取り賄ひ、御台の御行方尋ねんと、笠深々と深緑、土手の並木にさしかゝれば。向ふからも深編笠、われに違はぬその出で立ち、互ひにそれぞと近く寄り、

「梅王丸か」

「これはく桜丸。ヤレそちに逢ひたかつた。マア話す事」

「聞く事あり」

と、兄弟木陰に笠傾け、

「サテまづ問はう。その方はいつぞや加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ尋ね行きしと、内宝八重ないほうの物語。

なんとお二方に尋ね逢ふたか」

「成程、道にて追付き奉り、菅丞相御流罪と聞くより対面なさしめ奉らんと、安井の岸まで御供せしに、御対面叶はず。輝国殿の計らひにて、御帰洛願ひの妨げとお二方の御縁も切られ、姫君は土師はじの里伯母君の方へ御出で。齋世せとよの宮様は法皇の御所へ供奉くぶし奉り、事納りしと言ひながら、納らぬは我が身の上。冥加に叶ひ御車を引く、そのありがたい事打ち忘れ、賤しき身にて恋の取り持ち。つひには御身の仇となり、宮御謀叛と讒言の種拵へ、御恩受けたる菅丞相様、流罪にならせ給ひしも皆この桜丸がなす業と、思へば胸も張り裂くごとく、今日や切腹、明日や命を捨てうかと、思ひ詰めたは詰めたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べてみると当春より、喜び勇みおはする

に、われ一人欠けるならば、不忠の上に不孝の罪。せめて御祝儀祝ふたと、詮なき命今日までも、ながらへる面目なき。推量あれ、梅王」

と、拳を握り齒を喰ひ締め、先非を悔いたるその有様、梅王も『理り』と、暫し詞もなかりしが。

「才、道理々々。われとても主君流罪に逢ひ給ふ上は、都に留まる筈なけれど、御館没落以後、御台様の御行方知れず、まづこの方を尋ねうか、筑紫の配所へ行かうか、ととつおいつ心は逸れど、その方が言ふ如く、年寄つた親人の七十の賀の祝ひもこの月、これも心にかゝる故思はず延引。互ひに思ひは須弥大海。是非もなき世の有様」

と、兄弟顔を見合はせて、涙催す折からに。鉄棒引かなぼういて先払ひ、

「先退いて片寄れ」

ぞうしきと雑色がいかつ声、梅王立寄り、

「どなたぞ」

と尋ぬれば、

「本院の左大臣時平公、吉田への御参籠。出しやばつて鉄棒喰らふな」

と、言ひ捨てゝ急ぎ行く。

「何と聞いたか桜丸、齋世の宮管丞相を憂目に逢はせし時平の大臣、存分言はふぢやあるまいか」

「成程々々、良い所で出つくはした」

と、兄弟道の左右に別れ、尻ひとつからげ身構へし、今や来たと待ちあたる。程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる、時平の大臣が路次の行粧おとしど、さながら君の御幸みゆきの如く、隨身青侍せいし前後に列し、大路狭せはしと軋ゆらせたり。兩人木陰を飛んで出で、

「車遣らぬ」

「車遣らぬ」

「車遣らぬ」

と立ち塞がる。

「ヤア何者なれば狼籍する。見れば松王が兄弟梅丸桜丸。ム、ム、ム、聞こえた。主に放れ扶持に放れ、気が違ふての狼籍か。但しはまたこの車、時平公と知つて止めたか、知らいで止めたか。返答次第、容赦はせぬ」

と、白張の袖まくり上げ、掴み拉ひがんその勢ひ。梅丸えせ笑ひ、

「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ヤア言ふな言ふな。気が違はねばこの車、見違へもせぬ時平の大臣」

「齋世親王菅丞相讒言によつて御沈落。その無念骨髄に徹し、出逢ふ所が百年目と、思ひ設けし今日只今、桜丸と」

「この梅王、牛に手馴れし牛追竹、位自慢で喰らひ肥えた時平殿のしりこぶら、二つ」

「三つ」

「五六百喰らはさねば、カ、カ、カ、堪忍ならぬ。言はれぬ主の肩持ち顔、出しやばつて怪我ひろぐな」

「ヤア法に過ぎた案外者、アレぶちのめせ、引括れ」と、供の侍声々に、前後左右におつ取り巻く。兄弟は事ともせず、取つては投げ退け、掴んでは、打ち付けくく投げ付くれば、辺りに近づく人もなし。

「待てらふくくくやい、ヤア、命知らずの暴れ者、いづれもお構ひあるな。御主人の目通り、御奉公はこの時節、兄弟と一つでない忠義の働き御目に掛けん。コリヤヤイ、松王が引きかけたこの車、止めらるゝなら、止めて見よやい」と、鼻づら取つて引き出す車。

「ホ、桜丸」

「梅王丸、ここになくばいざ知らず、一寸なりと」

「遣つて見よやい」

車の内ゆるぐと見えしが、御簾も飾りも踏み折り

くく、踏み破り、頭はれ出でたる時平の大臣、

「ヤア牛扶持喰らふ青蠅<sup>あおばい</sup>めら。轅<sup>ながえ</sup>に止まつて邪魔ひ

るがば、轍<sup>わだち</sup>にかけて敷き殺せ」

「ヤアさ言ふ大臣を敷き殺さん」

と、碎けし轅を銘々引提げ、大臣を打たんと振り上  
ぐる、

「ヤア、時平に向かひ推参なり」

と、くわつと睨みし眼の光、大千世界の千日月、一度

に照すがごとくにて。さすがの梅王、桜丸、思はず跡

へたぢくくく、五体すくんで働かず、

「無念、無念」

とばかりなり。

「なんと、我が君の御威勢見たか。この上に手向ひ  
すると、御目通りで一討ち」

と刀の柄に手をかくれば、

「ヤア松王待て、待て」

「ハ、ア」

「金巾子の冠を着すれば天子同然。太政大臣となつ  
て天下の政を執り行ふ時平が、眼前血をあへすは社

参の穢れ。助けにくい奴なれども、下郎に似合はぬ

松王が働き、忠義に免じて助けてくれる。ハレ命冥  
加なうづ虫めら、ム、ハ、ハ、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、

ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

と辺りを、睨んで進み行く。

「ア、よい兄弟を持つて兩人ともに仕合せ者。命

を拾ふたありがたい、忝<sup>かたじけな</sup>いと三拝せよ」

と言はれて兩人、くはつとせき上げ、

「エ、おのれにも言ひ分あれども、親人の七十の  
賀祝儀済むまで。ノウ梅王」

「オ、その上では松の枝々切折つて、敵の根を絶  
ち葉を枯らさん」

「オ、それはこの松王も、親父の賀を祝ふた後で、  
梅も」

「フム」

「桜も」

「ナニ」

「落花微塵。足元の明あかいうち、早く去れ、早く去れ」

「ヤア推参な、帰るをおのれに習はうか」

と、詰寄り詰寄る兄弟三人、互ひに残す意趣遺恨、睨  
んで、左右へ

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。